

特集

気候変動と異常気象から考える

異常気象ってなんだろう？

みなさん、気候変動とか異常気象という言葉聞いたことがありますか？

いつもの年より気温があがったり、ものすごく雨が降ったり、反対にぜんぜん雨が降らなかったり、寒い夏があったり、すごく大きな台風がやってきたり、いつもの年と天気の様子がちっと違うかも…って気づきませんか？

わたしたちの身の回りでは変化が少しずつ始めています。



では、異常気象とは、そもそもどういうものなのでしょうか。天気のことを調べている気象庁では、「アメダス」というシステムをつかって、全国約130箇所で温度や雨の量など観測しています。

ここで観測される値が「おおよそ30年に1回おこると考えられる値を超えた場合」に、異常気象と呼んでいます。つまり、めったに起こらないような変わった天気や天候のことを異常気象と言うんですね。

気候変動と異常気象の原因を探ってみよう

今年、気候変動に関する政府間パネル(IPCC)という会議が開かれました。その会議でびっくりすることが話されました。地球温暖化をすすめる温室効果ガスが出る量は1970年から2004年までの間に約70%増えたこと、そして、何もせずほうっておくと出る量がどんどん増え続けるという内容です。このままいくと2100年の気温は平均で、低い予想では1.8℃、最も高い予想では4.0℃上昇するそうです。

また、地球温暖化がすすむことによって、台風がいままでよりも強く大きくなったり、雨がたくさん降る回数がどんどん増えたりするそうです。どうやら、気候変動や異常気象は、地球温暖化と関係がありそうですね。

